

定期的な短期集中リハビリにより立位・歩容の改善、小脳皮質の容積増加を認めた脊髄小脳変性症の1例

岩井優依¹⁾ 浅倉靖志¹⁾ 谷川浩平¹⁾ 菊地豊¹⁾ 美原盤²⁾ 手塚由美³⁾ 荒牧勇⁴⁾ 平柳公利⁵⁾
池田佳生⁵⁾ 河島則天⁶⁾

- 1) 公益財団法人脳血管研究所附属美原記念病院 リハビリテーション科
- 2) 公益財団法人脳血管研究所附属美原記念病院 神経内科
- 3) 一般社団法人 輝水会
- 4) 中京大学スポーツ科学部
- 5) 群馬大学大学院医学系研究科脳神経内科学
- 6) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 運動機能系障害研究部神経筋機能研究室

44歳男性。27歳頃から歩行時のふらつきを自覚、35歳で脊髄小脳変性症と診断された(病型は未確定)。4年前(40歳時)に当院を受診、四肢体幹の小脳性運動失調と痙性対麻痺を認めた。立位姿勢は体幹前傾位、膝過伸展位でワイドベースのくの字型の姿勢、歩行は立脚中期に反張膝を呈した。以後、4週間の短期集中リハビリテーション(短期リハ)入院を年に2回、計8回にわたって実施し、加えて緊張軽減を目的とした水中環境でのリハビリを月1回定期的に実施した。この4年間にSARA総スコアの増加を認めず、短期リハ入院の繰り返しとともに立位姿勢時の体幹および上肢帯の過緊張軽減、歩容の改善を認めた。短期リハ入院前後のMRI画像をVoxel-based morphometry解析で脳灰白質容積の検討では、小脳皮質(特に第II脚およびVIIIB領域)と頭頂領域に容積増加を認めた。この結果は、リハビリ実施時の体性感覚入力による当該領域の活性化を示唆するものであり、本症例における立位姿勢、歩容改善の機序の一端を担うものと考えられた。